



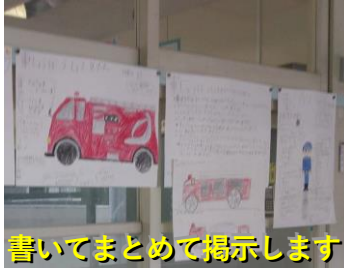
校長室だより

令和6年度

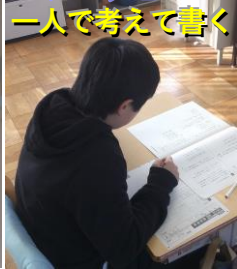
2月4日

NO.44

立ち止まって、見つめて、考えて、「書く」



書いてまとめて掲示します



一人で考えて書く



「標準学力調査」テストに黙々と取り組みます



昭和40年代、昔の文集「はだなし」



調べて書きます



三学期はまとめの季節であり、「書く」ことが多くあります。子供たちは、今年も文集「はだなし」の発刊に向け、一年の思い出を文章にしたためます。文集「はだなし」第一号の発行は昭和四十四年、市内ではもう学校文集がない学校も多い中、五十年以上の歴史をもちます。また、三十一日には「標準学力調査」が行われました。書くことを通して、客観的に子供たちの学力がはかられます。

学校文集、発刊当初はまだ手書きで、学校で製本されたものでしたが、第二号の巻頭言には、当時の柴田校長の「物事を注意深く見聞きし、深く考えることによつて文章を書く力を身につける」という言葉が載っています。時代が変わり「書く」が「打つ」に代わつてきても、今もその意義や「書く」ことの重要性は変わりません。見聞きしたこと、思ったことや考えたことを紙や画面に書くためには、そこで一度立ち止まり、考えなければなりません。テストも同様です。考えを整理したり、状況に合わせて言葉を選んだりすることで、思考力や表現力は高まります。

多様性の時代と言われ、元東大総長の濱田氏は『異なる考え方を持っている』など様々な『異なる』をもつた学生が一所に集まることでお互いに刺激を受け、切磋琢磨し成長できる』と言っています。同様に、一つの文集においても、子供たちの様々な「異なる」姿や見方・考え方が見られ、子供の成長の場になります。

反面、画一化の時代とも言われています。社会においても、報道など画一的で「こうでないといけない」という考え方が強くみられます。文集も、ともすると全てが「楽しかった」で片付けられてしまいます。画一的な表現は、子供たちの感覚や考えをも「こうでなければならぬ」という、個性のないものにしてしまいます。「書く」ことを通して、様々な見方・考え方のできる子、そしてそれができる環境を作っていくことも大切だと考えます。

○校舎のすぐ際にあったバックネットですが、老朽化で使わなくなったため撤去いたしました。南隅のバックネット裏の遊具についても、古くて危険なため、撤去いたしました。体育館舞台の中幕については、古く色褪せ破れていたため換えてもらえる予定です。